

文房四宝

資料提供
(株)ならや本舗

【第八回】「墨の種類と特徴」

◇はじめに

書道において欠かすことのできない文房四宝(筆・墨・硯・紙など)について、基本的な知識を中心に連載しています。令和六年六月号では墨の造り方と原料について述べました。今回は意外と知られていない墨の磨り方と墨の種類および、それぞれの特徴などを解説します。

◆磨る前に知っておいてほしいこと

「墨が磨れない、墨が悪いんじゃない？」と言われたことがあります。中国の墨では、ごくまれに「磨れない墨」というものがありますが、うまく磨れないのは、力を入れて墨を磨ることで硯が目詰まりしている場合や、墨で液体墨(墨汁)を磨っている場合がほとんどです。液体墨を磨ったあとに、液体墨が付着した状態のまま墨を乾かしてしまうと、墨の表面に硬い膜ができてしまうことがあります。墨液を磨ったときは墨液をふき取ってから水で磨りなおすことが大切です。

また、墨液を入れた硯を洗わず放置すると同

様に膜ができてしまうことがあるので、硯は使用後必ず洗ってください。墨が磨れない場合、硯面を触ってツルツルになっていたら膜ができているか目詰まりしている可能性があるのです、

専門店で見てもらうことをおすすめします。砥石を使用する方法もありますが、硯を傷つけてしまうこともあるので注意が必要です。

■磨るときに力加減

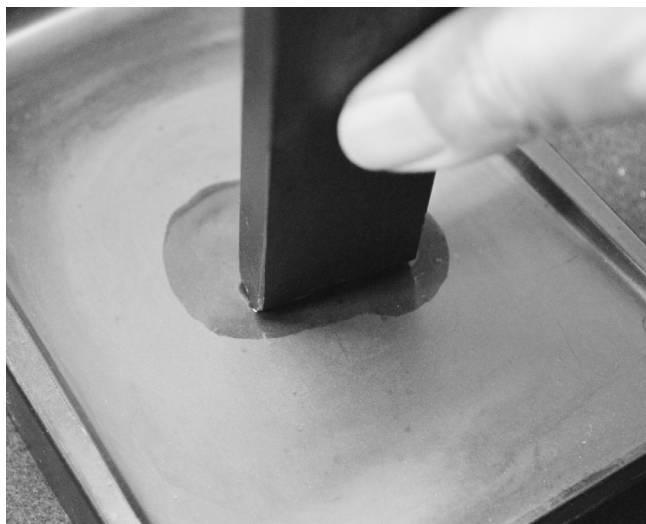
「墨はお年寄りか病人に磨らせろ」と言われることがあります。これは力を入れずにゆっくり墨を動かすことを意味しています。どうしても早く濃く磨りたい気持ちが出てしまい、墨を硯に力強く押し当ててすばやく動かしてしまいが

ちですが、力を入れて磨ると粒子の粗い磨墨液になってしまい、その墨本来の良さが失われてしまいます。また、硯に傷をつけてしまうこともあります。墨は押さえつけて磨らなくても自身の手の重さと墨の重さで十分磨れます。多少時間はかかりますが、力を抜いてゆっくり動かすことを心がけてください。

なお、磨るときに墨の持ち方はご自身の持ちやすい方法で構いません。「磨り口が真っすぐになるように立てて磨る」ように教わっている方が多いと思いますが、これは立てて磨る方が効率よく磨れるためで、斜めに磨っても問題はありません。ただ、磨り口が真っすぐになると、短くなった墨と新しい墨をくつつけるときに便利です。

■磨り方

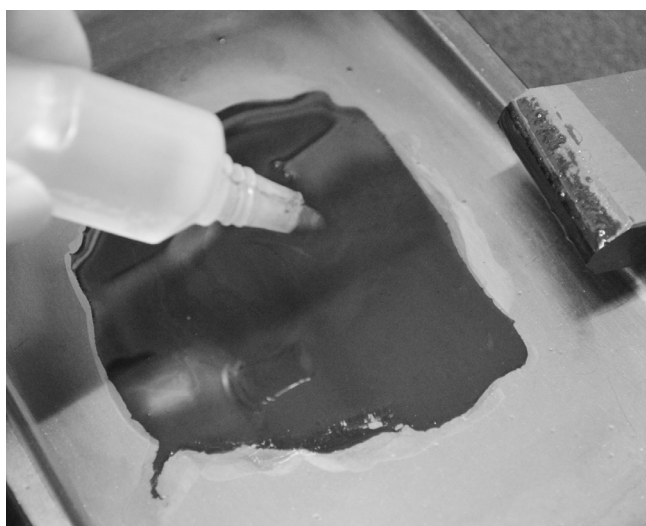
水の量は、最初に水滴を1、2滴垂らし、力を入れずに練るように磨ります(写真1、2)。しばらく磨っているとねっとりしてくるので、さらに水を1、2滴垂らして磨ります(写真3、4)。これを繰り返すことで良い磨墨液が出来ます。水を多くしてしまうとかえって磨る時間がかかるため、はじめは水の量は少なめで磨り徐々に増やしていく方が早く磨れます。また、淡墨を作る場合は一度濃い墨をしっかりと



【写真2】力を入れずに練るように磨る



【写真1】まず水を垂らす



【写真4】再度水を加える



【写真3】粘り気が出てくる



【写真5】鮮やかな装飾の菜種油煙墨

作ってからそれを薄めると、きめの細かい磨墨液になるので墨色がきれいに出来ます。

■さまざまな原料の煤

墨の原料となる煤の種類は、大まかに油類から採る油煙と松ヤニから採る松煙に分けられています。油煙には石油類から採る油煙、植物から採る油煙があり、植物から採る油煙では菜種油煙、胡麻油煙、桐油煙、椿油煙が一般的ですが他にも檜油煙、竹油煙、米油煙などもあります(写真5、6)。



【写真6】さまざまな原料から製造されている
(左から竹油煙、檜油煙、胡麻油煙)

墨色の特徴として、一般的な油煙系の墨は光沢のある黒で、水で薄めて淡墨にした場合茶色味かかった墨色です。

松煙は赤松から採る煤を使用しますが、枯れている赤松と切つてすぐの赤松（生松松煙いきまつと言われたりします）から採る煤では、墨の色味が変わります。前者は光沢のない漆塗りのような黒色で、水で薄めて淡墨にした場合はほんのり青味かかった灰色系の色になります。後者は油煙系の墨色に近く、半光沢のある黒で、水で薄めて淡墨にした場合は少し赤っぽい茶色味のかかった墨色です。

また、茶墨や青墨といった呼称を聞いたこと



【写真7】松煙墨に近い色を出す青墨

があると思います。それは、磨った墨を薄めて淡墨にして書いた際の墨色の違いを大まかに分別した表現で、青墨とは松煙墨のような青味のかかった灰色系の色が出る墨を、茶墨は油煙墨のような茶色味かかった色が出る墨を指す呼称です（写真7）。青墨には松煙以外にも青煙（灰色系の墨色）という煤を用いた墨や本藍などで色を足して青味を強くした墨など、各メーカーが工夫して青墨を造っています。

また、松煙は粒子の大きさが油煙の2〜50倍の大きさなので、松煙墨と油煙墨を混ぜると深みのある黒味の強い墨色になり、種類の違う煤の墨を混ぜて独自の墨色を出してみるのも面白



【写真8】意匠が施された唐墨

いと思います。

■中国製の墨「唐墨」

日本で造られた墨は「和墨」、中国で造られた墨は「唐墨」と呼ばれています（写真8）。

唐墨の特徴は透感のある墨色で、サラツとしてのびがよいことです。使用している煤は、日本と同じく油煙墨と松煙墨があり、「油煙101、油煙102、超高級漆煙、桐油煙、全煙」といった表記がされているのは油煙墨で、表記されている内容によって使用している煤のランク分けがされています。松煙墨は「松煙」と表記されている場合がほとんどです（写真9）。



【写真10】主に写経で用いられる金墨



【写真9】原料が刻まれている



【写真11】青や緑などさまざまな色墨

また、使用している膠にかわの質が日本と異なっており、和墨は粘度の強い膠を使用しているのに対し、唐墨は粘度の低い膠を使用しています。なお、唐墨は動物性の膠より粘度の低い魚類系の膠を使用しているといわれており、それは中国と日本の水質の違いが関係しているそうです（詳細は残念ながら企業秘密のため教えてくれません）。いずれにせよ唐墨は粘度が低い膠を使用しているため、膠が多く含まれています。そのため煤と膠を混ぜると弾力が強くなり、手で採とみ合わせることが難しくなるので、木槌きづちなどをを用いて練ねっては叩たたいてと何百回、何千回と練り返し墨を練ります。この作業を練り返し行うことで、きめの細かい墨が出来上がり、粘度が低い膠を使用しているからこそサラッとした透明感のある墨色になるのです。

■カラフルな「色墨」

墨は黒色だけでなく他の色の墨も製造されています。これらを「彩墨」や「色墨」と呼びます（ここでは「色墨」とします）。代表的なところでは朱墨です。今では液体墨が使われることが多くなりましたが、添削で使用する朱墨はもともと固形墨でした。朱墨の原料は辰砂しんしゃと呼ばれる水銀と硫黄いおうの化合物（硫化第二水銀）で、顔料などの朱色に対して本朱ほんしゅといえます。昔から全国各地で産出されており、奈良の春日大社かすがたいしゃの本朱塗りが有名です。水銀の化合物なので小さくてもずっしりと重みがあります。また、弁べん柄がらは酸化した鉄（酸化第二鉄）を原料とした茶褐色の墨です。弁柄も防腐・防虫剤として外壁塗料に昔から使われており、本朱と弁柄は経年変色がない色墨として使われてきました。他に写経で金文字や銀文字を書くための本金墨や本銀墨、安価な赤金墨、青金墨や洋銀墨などもあります（写真10）。

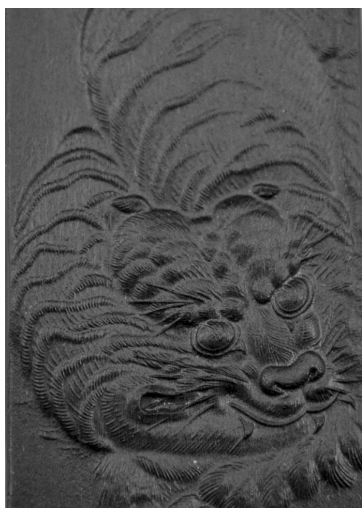
現在は鉱物を使わず顔料を使用することによって今まで造れなかった色やラメ入り、パステルカラーの色墨なども造られています（写真11）。また、顔料と煤を混ぜた墨も造られていて、水で薄めて淡墨にした場合、煤の色とその顔料の色が混ざった色つきの墨などさまざまな色墨が製造されています。



【写真13】 1文字2mmほどで千字文が刻まれる



【写真12】 さまざまな形の墨



【写真15】 磨るのが惜しくなる仕上がり



【写真14】 側面まで妥協なく柄が刻まれている

■個性的なデザインの墨

墨は木型に入れて成形しますが、木型は主に固い梨の木などを使用しています。その型は製造元のオリジナルデザインであったり、同じデザインで社名だけ変えていたり、さまざまなデザイン

ンがあります。少し変わった形の墨（写真12）や、墨型彫刻師の技が光る墨（写真13・14・15）をご紹介します。

さまざまな形の墨：右から人形型、和綴本型（蒼苔）、ひょうたん型（玄

泉）、巻物型（黄梁）

墨型彫刻師の見事な仕事

◇千字文：2.3 cm×9.8 cmの両面に千字文が彫られている。一文字のサイズは2 mm程度（写真13）。

◇祥鳳：墨型のパーツは前面と側面で分かれているが柄を合わせて彫られている（写真14）。

◇獸王射人：動物の毛を見事に表現（写真15）。

■古くなった古墨について

現存する最も古い墨は正倉院に残されている中国と韓国の墨です。使用できるかどうかは別として、現在も固形物のまま残っています。ちなみに、江戸時代に造られた墨がありました。が十分使うことができました。

よく、「小学生の時に学校で買った書道セットに入っている墨ってまだ使えるの？」と質問されますが、まだまだ十分に使えます。古くなった墨は「古墨」や「枯れ墨」と呼ばれます（ここでは「古墨」とします）。墨は製造してから時間が経つと、膠成分がだんだん弱まっています。これを「膠が枯れている」と表現しますが、膠が枯れてくると墨は少し軽くなり、粘りが少なくなるとサラッとした磨墨液が出来るので、筆運びが軽くなります。それを水で薄

めて淡墨にした場合に「基線」が出てきます（筆が紙に触れた部分の際に出る線）。基線は最初に書いた部分が一番上に出るので、とても不思議です。松煙墨などは古くなると青味が強くなったり、鉱物性の油煙墨は茶色味が強くなるなど墨色に変化が出ます。また、和墨は軟らかくなり磨るのが容易になります。唐墨は逆に硬くなつて磨るのに時間がかかります。使用する膠の質と量が関係していると思われませんが、古墨となった唐墨を磨る場合は根気よく磨ってください。

また、墨は古くなると希少価値が高くなり販売価格が上がります。ただ、古墨には製造されてから「何年経ったら古墨と呼ぶ」といった定義はなく、10年経てば古墨としている墨もあれば、100年経たないと古墨としないなど、とてもあいまいです。見た目では全く判断できないので、10年しか経っていない墨を100年経った墨として価値を上げて販売することもできてしまいます。残念ながらそれで儲けようとする販売者

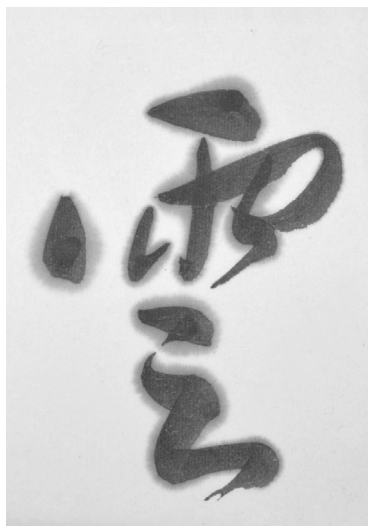


【写真16】 製造年表記は参考程度にとどめるのがよい

は一定数いると思うので、古墨を購入する場合は「何年製造」といった表記が確認できる墨を購入することをおすすめします。ただ、唐墨は「仿古墨」といって昔の墨の型をまねて墨を造ることがあり、製造年も墨型に古い年代、例えば乾隆年製（清代製造の意。写真16）などと彫られているため、製造年が入っていてもそれが本当の製造年かの判別ができないので気をつけてください。まれに逆の場合（古い墨を一般の墨と同じように販売すること）もあるので、そのような古墨を探して販売店や古道具屋を巡り歩くのも面白いかもしれません。

■古墨の味わいが出る添加煤

古墨の特徴は膠が枯れて粘りが少なく、淡墨で使用すると「基線」がはっきり出てくるところです（写真17）。これは墨の煤の量に対して膠成分が経年劣化して減ることによって起きます。



【写真17】 古墨ならではの味わいが出る

しかし、墨は古くなると希少価値が高くなり販売価格が上がるため、気軽に古墨を手に入れるのは難しいと思います。

ちなみに、新しい墨に煤を足せば墨色にこだわらなければ「基線」を出すこともできます。

ただ、「煤を足す」といっても、煤は粉状で粒子が細かすぎるために水とは簡単に混ざりませんが、膠を入れると不思議と混ざりますが、それでは普通の墨と変わらなくなってしまいます。

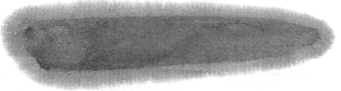
そこで、各メーカーも試行錯誤を重ねて古墨調になるような墨を開発しています。添加用墨や添加用煤といった商品です。使用するには少し慣れが必要ですが、容易に「基線」を出せるので作品制作の幅が広がります（写真18）。

墨は多数の種類があり選ぶ時に悩みはつきものです。次回は墨での表現として、墨の選び方や硯や紙との相性などを述べたいと思います。

入れる前



入れた後



【写真18】 添加用墨を入れる前と入れた後